

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

9

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。

フーフト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

登場
CHARACTER
人物

第一章 のんびりじよう。

僕、茅野^{かやの}巧^{たくみ}はエーテルディアという世界に転生した元日本人。

僕の異世界生活は、この世界に来るきっかけを作った神様の一人、風神シルフィリール——シルの眷^{けん}属^{ぞく}となったり、アレンとエレナという双子の子供を保護したりして始まった。

アレンとエレナは実は水神様の子供だったんだけど、今では本当の弟妹のように過ごしている。素材を採取したり、迷宮に潜ったり……この世界での出来事は何もかも新鮮で、あつという間にそろそろ一年が経つ。

常識なんて何も知らない僕がここまでやってこられたのは、この世界の人達が手助けしてくれたからこそだ。

最初に辿^{たど}り着^ついた街のシーリンでは、騎士であるグランヴァルト・ルーウエン様やアイザック・リスナーさん。次に訪れた街、ベイリーではアイザックさんのお兄さんで領主であるセドリック・リスナーさん。王都ではヴァルト様の両親であるマティアス・ルーウエン、レベッカ・ルーウエン夫妻。さらにさらにガディア国の王族の皆さん。

他にも親しくしてくれる知り合いはたくさんいるが、いろんな人に助けられている。

今はケルムという街にいるが、そこでも『ドラゴンプレス』という冒険者パーティの一員であるルドルフさんがいろいろと手助けしてくれている。

今日も今日とて、冒険者ギルドで薬草を売却したのだが、珍しいものだとは全く思わずにいろいろ売ろうとして、そこでルドルフさんから正しい知識を教えてもらった。

しかし、稀少なものだと教えられても、それがひょんなことから簡単に手に入ったりするので、どうしてもそうだという認識に欠け……ついやらかしてしまうことも多いんだよね。

「タクミ！ 帰ってきたか！」

僕と子供達、それからルドルフさんがケルムの街で宿泊している『白猫亭』という宿に戻ると、店主であるダンストさんが待ち構えていた。

「ダンストさん、どうしたんですか？」

「ザックに聞いた。ケルム岩塩を持っているんだって？」

「はい、持っていますけど……」

「少し売ってくれ！」

ザックさんから？ ああ、ザックさんはルドルフさんと同じ冒険者パーティのメンバーだから、今日出かけた時にでも話題になったかな？

そう思っていると、隣でルドルフさんがすまなそうな顔をしていた。

「あゝ、すまん、タクミ。情報源は俺だ。今日、『料理を作る腕が良いと、素材の良し悪しはあまり関係ない』みたいな話になってな。だが、そこでうちのパーティのアイリスが、ケルム岩塩を使えば自分でも美味い料理が作れるはずだって息巻いたんだよ。それを『無理だ』とザックに挑発されて、ケルム岩塩を掘り出して試してみるなんて言い出したんだ」

「……ああ、それで僕がケルム岩塩を持っているから、少し分けてもらえ的な話になった感じですか？」

「正確には『売ってもらう』だがな」

なるほど、そういうことだったのか。

「それで、その話題がここでも出て、ダンストさんの耳に入っただけですか」
僕の言葉にダンストさんが頷く。

ケルムの鉱山で見つかる岩塩——ケルム岩塩は人気があるって聞いていたけど、需要は主に貴族だと思っていた。だって、そこそ良い値段で売れたからね。

まあ、高いと言っても所詮は塩だから、普通の料理人でも手が出せるくらいなんだろうな。それでダンストさんも、厨房用に用意しておきたいところだろうな。

「料理がどんな風に変化するのか一度だけ使ってみたいんだ」

「……一度だけ？」

あれ？ 僕が思っていたのとちょっと違う……っぼい？
えっと……使ってみたってことは、どんな味なのか試してみたいってことだよな？
これまでに使ったことはないだろうか。

「そりゃあ、良い食材を使って料理を作りたいという欲求はあるが、俺はそれ以上に、普通の食材を使っても良い食材に負けない料理を作りたいんだ！」

「おお！」

ダンスストさんの心意気、格好良い!!

「ケルム岩塩を使ってみたいと言ったのは、味を知らないとその味を目指せないからですか？」

「ああ、そうだ」

うん、合っていたようだ。

やはり「目指す味」というものを知らないで切磋せつさしづらいからな！

「ダンスストさん、一回分の塩でいいのなら譲ります。お金はいりません」

「だが、それでは……」

「ダンスストさんの目標を応援したいんです。あつ、僕が所持している魔物肉とかも提供しますよ」
他人には高ランクの魔物肉をほいほい提供しないようにという人から忠告されているが、ここはダンスストさんのために一肌脱はだごうじゃないか！

えっと……イビルバイパー、オークジェネラル、アーマーバッファロー、コカトリスあたりの肉

なんてどうだろう？

そう考えていると、ルドルフさんが慌わがてて声を上げた。

「待て待て待てっ！ タクミ、今考えていることは絶対に口にするなよ！ いいか、絶対だぞ！」

そして、現物も出したりするなよ！」

「……え、駄目ですか？」

「駄目だ！ 間違いなく駄目だ！」

えゝ、食材の提供は駄目かゝ。

というか、ルドルフさんはとうとう僕が内心で考えていることまで察するようになったかゝ。

「ほら、あれだ。質素な食材のほうが塩の良し悪しがわかりやすいはずだ！」

ルドルフさんがそう言ったが、確かにそれはその通りだ。

コカトリスの肉でサンドイッチを作った時もそうだったけど、美味しい肉を使っちゃうと、本当に塩で美味しくなっているかわからなくなっちゃったもんね。

「手に入りやすい食材か……」

「年中食べられているものと、エナ草やマロ芋だきまうだな。それで妥協たきまうしろ」

「マロ芋！」

マロ芋というのは地球でいうジャガイモみたいな野菜なんだけど……ポテトチップスなんて良い

んじゃないか？

マロ芋は一般的な食材で、安くて年中手に入る。

それにポテトチップスなら、スライスした芋を揚げただけだから、塩の味がよくわかりそうだしな。

何よりも、僕が食べたいのだ！

「何だ？ 何か良い料理が思いついたのか？」

僕が目輝かせたのを見て、ルドルフさんが期待するような表情になる。

「はい、マロ芋を揚げたものが食べたいな〜って」

何か、この説明だとフライドポテトみたいだが……とりあえず、それはいい。

そんなことより、ルドルフさんの中ではいつの間にか、僕が料理を作るような流れになっていないか？

「あげるって何だ？」

ルドルフさんから待ったが掛かってから成り行きを見守っていたダンストさんが、調理方法の話が出た途端、会話に参加してきた。

「たっぷりの熱した油で加熱する調理方法です」

「そんな調理方法があるのか。それはかなり油を使うよな？」

「そうですね。ちなみに油なんですけど、何度かは使えますけど、ずっと使い続けると臭いがするよ

うになりますね」

「なるほど」

ダンストさんは真剣な顔で話を聞いている。

「ダンストさん、夜の営業の準備は終わっているんですか？ 今から時間があるなら、一緒に作りませんか？」

「ああ、終わっているから問題ない。是非とも頼む！」

というわけで、僕はダンストさんと一緒にポテトチップスを作ることにした。

早速、厨房に移動して準備を進めていく。

よく洗った皮つきのままのマロ芋を薄くスライスして水にさらし、しばらくしてからよく水気を拭く。

「はなれたー！」

そしていよいよ揚げるといふ段階になると、アレンとエレナが元気よく声を上げた。

それを見て、ダンストさんが首を傾げる。

「タクミ、あれはどういう意味だ？」

「揚げるのは危ないので、離れるように言っているんです」

「ああ、なるほど」

えっと……トンカツを作った時かな？ 揚げる時は少し離れてくれないと作れない、と言ったのを覚えていたのだろう。

さっきまでお手伝いをしてくれていた二人だったが、今は僕とダンストさんからしっかりと距離を取っている。

「じゃあ、揚げますか」

最初のうちは僕が見本を見せるように揚げていき、途中からダンストさんと交代する。

どんどん揚げて、皿が山盛りになるまで作った。

たくさん作るのに越したことはないだろう。ポテトチップスってあつという間になくなってしまいうからな！

「最後に塩、っと」

普通の塩とケルム岩塩、味比べのために二種類かけてみる。

「アレン、エレナ、これを食堂のほうに運んでー」

「はい」

ポテトチップスを小分けに盛った皿を、アレンとエレナに運ぶように頼むと、張り切って運んでいった。

「ダンストさん、僕達も食堂に移動しましょう」

「おう、そうだな」

僕も皿を持って食堂に向かうと、そこには子供達と『ドラゴンプレス』のみんなが、輪になるようにポテトチップスを取り囲んで待っていた。

さっきまでルドルフさん以外はいなかったのに、いつの間に集まっていたんだ？

「タクミ、早く食わせてくれ！」

ルドルフさんが待ちきれないといった風に言ってくるので、思わず笑ってしまう。

「ダンストさんが最初ですよ。——アレンとエレナの分はこれだから、こっちにおいで」

「うん！」

「熱いから気をつけて、ゆっくり食べるんだよ」

アレンとエレナに声を掛けると、喜んで輪から抜けてこちらに駆けてきたので、ゆっくり食べるように言いつける。

「さあ、ダンストさん、どうぞ。ちなみに、こっちがケルム岩塩ですね」

「じゃあ、いただく」

ダンストさんは緊張した面持ちで、それぞれのポテトチップスを食べていく。

「もう、いいな？ ダンストが食べたんだし、俺達も食べていいよな？」

ダンストさんが口にしたのを確認して、ルドルフさん達がポテトチップスに群がり、バリバリと食べ始めた。

「おお！ このパリパリ感が堪らないな！」



「何だこれ、うめえ！」

「美味^{うま}っ！これがマロ芋なのか!？」

「美味しいです！」

ルドルフさん達は感想を漏らしながら食べているが、とにかく勢いが凄い。アレンとエレナの方は別にしておいて良かったな。

「……美味^{うま}い。普通の塩のほうも美味^{うま}いんだが、ケルム岩塩は何て言うか……旨味が別物だ」

そんな中、ダンストさんが静かに言葉を零す。

「そんなに違いがわかりますか？」

「ああ」

僕も食べてみることにする。

「あ、本当だ。この食べ方だと味の違いがわかりやすい」

「「こっち、おいしいー」」

「うん、そっちはケルム岩塩のほうだな」

言葉では言い表すのは難しいが、ケルム岩塩のほうが美味しく感じた。

正直、こんなにも差が出るなんて思いもしなかった。これならケルム岩塩を使うだけで料理が格段に美味しくなるという話も信憑性が出てくるな。

「いや、それにしても……止まらない」

久しぶりに食べたが、やはりポテトチップスはいいな。

これってお手軽塩シリーズを使えば、いろんな味のポテトチップスが簡単に作れるんじゃないか？ あ、でも、のり塩がない！ ポテトチップスにのり塩は欠かせないのに！

ん、フイジー商会会長のステファンさんにお願ひしたら、青海苔あおのりを探して作ってくれるかな？ そんなことを考えていると、ルドルフさんが真剣な表情でこちらを見ってくる。

「なあ、タクミ」

「何ですか？」

「これ、タクミから貰ったあの塩を使えば、いろんな味が楽しめるんじゃないか？」

おお！ ルドルフさんも気がついたか！

「僕もそれを思っていたところです」

特にカレー塩なんか、子供達が好きだと思っただよね。

「ルドルフさん、いろんな味の塩って何ですか？」

僕とルドルフさんの会話に、アイリスさんが疑問に思ったようだ。塩について尋ねてくる。

「タクミに貰ったんだがな、振りかけるだけでいろんな味になる塩があるんだよ！ 野菜でも肉でも、ただ焼いただけのものに一振り！ それだけで味の変化が楽しめるのさ！」

「それは凄え！ いろんな味って何があるんですか!？」

「そんな便利なものがあつたんですね！」

「え！ 何ですか、それ！ とつても画期的じゃないですか！」

ルドルフさんがお手軽塩について自慢気に他のパーティメンバーに教えると、三人ともとても食いついていてた。

「聞いて驚け！ コシヨウ、カレー、ニンニク、ショウガ、レモネー、ミンス、ハーブ、唐辛子、オレン、ユズユ、ライネ、緑茶。十二種類の味がある！」

「『おお！』」

お手軽塩の製作に関わった僕でもたまに種類を忘れそうになるのに、ルドルフさんは一度聞いただけでもしっかりと覚えているようだ。凄い記憶力だな。

「焼いたものにかけるだけでいいのか！」

「それ、野営にぴったりですね！」

「じゃあ、これでアイリスの料理から解放される！」

ザックさんとギルムさんが息ピッタリである。

そんな仲間の言葉にアイリスさんの様子がおかしくなっていく。

「……ザック、ギルム」

怒っている。間違いなく、アイリスさんは激怒している。

しかも、効果音が——ゴゴゴッ、と聞こえてきそうである。

「『……あう』」

そんなアイリスさんを見て、アレンとエレナが怯えてしまった。

しかし、それに気づかず三人は会話を続けている。

「……保存食だけでは味気ないだろうと、頑張っていたのに！ 人の親切を何だと思っているんですかっ!!」

「誰も頼んでないだろう!」

「気持ちはいりたいんだが、どう頑張っても食べられないものだったしな。それに、食材の無駄?」

「なんですって!!」

ザックさんもギルムさんも、さらに煽るようなことを言わなくてもいいのに。

「……また始まったか」

「ルドルフさん、止めなくていいんですか?」

ルドルフさんがアイリスさん達の言い合いから逃げるように移動したので、僕はアレンとエレナを抱きかかえて離れたテーブルへと移動する。

「まあ……これはいつものことだな。ザックは基本的に思ったことはすぐに口にしてしまうタイプだし、ギルムは大人しめな奴ではあるんだが、無駄が嫌いなんだよ。アイリスはあれで頑固だから言われれば言われるほど引かなくなるタイプだしな」

「……それで、ルドルフさんは傍観するんですか?」

「俺にはあれを止めるのに使う体力はない。それに、あれであの三人は仲が良いんだよ。じゃれ合っていると思えばいい」

「……ガチの喧嘩っぽく見えるのに、じゃれ合っている?」

「そうは見えませんが……」

「だろうな」

僕としては仲違いしてしまうのではないかと心配になるが、ルドルフさんは心配する素振りもない。本当にいつものことで、かつ些細なことなのだろう。

「そうだ、タクミ。野外で美味いスープを簡単に作る方法はないか?」

ルドルフさんが突然話題を変えた。アイリスさん達のこととは完全に放っておくようだ。

「スープですか?」

「そうだ。タクミから貰った塩のお陰で、ただの焼きものなら格段にマシになる。となると、今度こそスープを良くしたくてな」

「ん?」

スープを簡単に作る方法ねえ。

とはいっても、スープって料理としてはそんなに難しくもないよな? 具材を煮て、調味料で味付けするだけだし。

それをもっと簡単にするなら、お湯を注ぐだけでできるタイプのスープ……粉末とか、フリーズ

ドライか？

粉だと具がないものになってしまっし、お手軽塩でも代用はできそうから、ここはやはりフリーズドライだろうな。確か凍らせて乾燥かんそうさせればよかったはずだから、それなら魔法でできるだろう。

「……できないことはないかな？」

「本当か!？」

僕の眩くらきにルドルフさんは表情を明るくする。

「本当に上手くいくかはわからないので、近いうちに試してみます」

「おう！ 頼む！」

フリーズドライにすれば日持ちするだろうから、子供達に持たせておく非常食にもなるだろう。

積極的に頑張ってみようかな。

「でも、どうして突然料理に興味を持ったんですか？」

「あいつらが言い合いになるのは基本、料理の話題になった時だからな。食事に不味まずいものが出なくなれば、言い合いも減るかと思ってな」

なるほど。一見、放っておいたのかと思ったが、ルドルフさんはルドルフさんのやり方で氣遣きざしっていたようだ。

それにしても……そんなに頻繁ひんぱんに料理のことで言い合いになるのも凄い。まあ、それだけアイリスさんの料理に破壊力があるということだな。

「お前ら、いい加減にしないと子供達に嫌われるぞ」

「「へ？」」

そろそろ食堂が営業を始める時間になることもあってか、ルドルフさんが言い合っている三人を止める。

すると、アイリスさん達は不思議そうな顔をしながらこちらを見た。そして、子供達が僕にしがみついている様子に気がついた。

「お前らが大声を上げるから、すっかり怯えてしまっているぞ」

「「ええ!？」」

「子供達に嫌われる、それすなわち、タクミにも嫌われる」

ルドルフさんはそう言ってうんうんと頷く。

まあ、そうだな。子供達が怯えたままなら、僕はアイリスさん達には近づかないようになるかな。あな。

「そうなるんだな、もう美味うまいものにありつけなくなるといことだ」

「「ええー!!」」

ルドルフさんの言葉に、ザックさん、ギルムさん、アイリスさんが悲鳴のような声を上げた。

そこかい！ 大事なのは美味しいものなのかい!!

「……ルドルフさん、僕の価値が料理だけみたいに聞こえるんですけど」

「わかりやすいたとえが料理っただけで、タクミは良い奴だっただけでわかっているから細かいことは気にすんな！」

「……」

にかつと笑うルドルフさんに、僕はそれ以上何も言えなくなった。

◇ ◇ ◇

翌日、僕は早速フリーズドライのスープを作ることにした。

場所は街の外。今回は北の山側じゃなく、東門を出て平原へとやって来た。

人がいないのを確認すると、まずはジュール達を呼び出す。

《今日は草原だ！》

《何するのー？》

初めに、スカーレットキングレオのベクトルとフェンリルのジュールが、わくわくした様子でじゃれついでくる。

《そうだな、今日はお料理かな？》

《ん、他の街に移動とかですかね？》

《わたしはまた採取だと思うの！》

飛天虎(ひてんこ)のフィート、サンダーホークのボルト、フォレストラットのマイルは、呼び出された用件を予想し合っている。

「今日は——料理がしたいんだよね」

《あら、私が正解かしら？》

「うん、そうだな」

予想を的中させたフィートは嬉しそうにする。

的中させたご褒美(ほうび)が欲しいのだろう、フィートは撫(な)でるように要求してくるので、僕はフィートを撫でながら話を続ける。

「僕が作業している間、みんなはアレンとエレナと一緒に遊んでいてくれないか？」

《それなら大歓迎！ 何して遊ぶ？》

《ふふっ、兄様、任せてちょうだい》

《兄上の作業の邪魔をさせないように、周囲の警戒もしないですね！》

《わーい、遊ぶ！》

《アレン、エレナ、何して遊ぶの？》

「「……うにゅ〜」」

僕のお願いにジュール達は二つ返事で了承してくれる。だが、何故かアレンとエレナが浮かない顔をしていた。

「どうした、アレン、エレナ？」

「おてつたいはー？」

「そうか。二人は手伝いをしてくれるつもりだったんだ？」

「うん！」

「ありがとう」

とりあえず、僕は二人の頭を思いつ切り撫でた。

「でも、今日は試行錯誤になるから、みんなと遊んでいてくれるか？」

「わかったー」

子供達は、今度は満面の笑みで頷く。

《じゃあ、何して遊ぶー？》

「ん？ さいしゅ？」

早速、とばかりにジュールが何で遊ぶか問いかけるが、子供達の返答はいつも通り過ぎるくらいいつも通りであった。

「……アレン、エレナ、採取は本来仕事だぞ？ 他にやりたいこととかはないのか？」

「……わかんない？」

「本当に何もない？ もうちよつと考えてみて」

「……うん？」

もう一度考えてみるように言えば、二人は首を傾げながら一生懸命に考えるが、何も思いつかないようだ。

「じゃあ、これなんてどうだ？」

僕は《無限収納》から、バブルアーケロンの泡——サッカーボールくらいのシャボン風船を取り出して、子供達のほうへ放る。

「あつ！ あわだー！」

アレンとエレナはシャボン風船のことを覚えていたらしく、目を輝かせた。早速、アレンとエレナの間でシャボン風船が行き来する。どうやらお気に召してくれたようだ。

《何これ？》

「かめの」

「あわ！」

《カメ？ 泡？》

ベクトルがシャボン風船に興味を示し、アレンがキャッチしたシャボン風船を鼻先で突く。

「バブルアーケロンっているだろ。そいつが逃げる時に出す泡だよ」

《えっ!?》

シャボン風船の正体を知り、真つ先にジュールが驚きの声を出す。

『細波の迷宮』で遭遇した亀の魔物であるバブルアーケロンは、敵が現れるとシャボン玉のような

泡を吐き出して相手の動きを妨害し、その間に逃げるといふ習性を持つ。

普通ならその泡はすぐに割れるのだが、《無限収納》に収納してから取り出すと、ナイフなんかで突いても割れなくなるのだ。

《バブルアーケロンの泡って触ると割れるよね!?》

《そうね。少なくとも、こんな風に弾力のあるものじゃなかったわよね》

《ぼくはバブルアーケロンと遭遇したことがあります。これがバブルアーケロンの泡ですか》

《お、ぼよんぼよんの!》

ジュール、フィート、ボルト、マイルも次々とシャボン風船に触っていく。

「これはそう簡単には割れないから、みんなで蹴り飛ばして遊ぶのはどうだ?」

《それ、何か楽しそうだね》

《やろう、やろう!》

子供達はすぐにバラバラに散り、まずはシャボン風船を手に使っていたアレンが蹴り飛ばす。

「それ!」

シャボン風船はぽよんと飛び、ベクトルのほうへ行く。

《よし、行くぞ》

続いて、ベクトルが飛んできたシャボン風船を思いつ切り前足で叩く。

「あつ!」

思いつき叩き過ぎたせいで、シャボン風船はベクトルのすぐ前の地面に叩きつけられ、高く跳ね上がる。

《ベクトル、下にじゃなくて、前に力を入れないと駄目よ》

《ぼくに任せてください……エレナ、行きますよ》

跳ね上がったシャボン風船の軌道を、ボルトは空中でエレナのほうへと変える。

《エレナ、こっち、こっち!》

「はい、いくよ」

エレナは飛んできたシャボン風船を、ジュールのほうへ上手く蹴り飛ばす。

《エレナ、上手! フィート、行くよ》

《はい。じゃあ、次はマイルね》

《はいなの……ふぎや!》

順調にシャボン風船を回すが、マイルがシャボン風船に潰されるという事件が起きてしまった。

みんな慌ててマイルのところに駆け寄る。

「マイル、大丈夫か?」

「だいじょーぶ」

《うう……大丈夫なの》

マイルは身体が小さいので、ちよつとこの遊びは辛いかな?

《この遊びはわたしには不向きっぽい。わたしはタクミ兄の傍そばにいるから、みんなで続けてなの！》

マイルを氣遣って遊びそのものを止めようとする子供達だったが、マイルが僕と一緒にいるから大丈夫だと説得し、今度は二人と四匹で再開したのだった。

再び、子供達が遊びに夢中になり始めたところで、僕はスープ作りを始めることにする。

《タクミ兄、今日は何を作るの？》

「今日はスープを作るんだよ」

《スープなの！ 何のスープなの？》

「それなんだよ。何のスープにしようかな」

ミソ汁、コンソメ、クリーム、トマト、カレー……と、ざっと思いつくだけでもベースのスープにはこれだけの種類がある。さらに、加える具材の組み合わせを考えれば、かなりの種類が思いつく。

「ん、この世界で一番馴染みがあるのはコンソメスープかな？」

コンソメにもビーフにチキン、ポアソンなどがあるけれど、今回はチキンコンソメにしよう！

《コンソメスープ！ わたし、具は卵がいいの！》

「卵か。うん、いいな。じゃあ、まずはそれを作ろう」

《やったなの！》

種類が決定したので、早速作り始める。

まずは捨てずに取っておいたコッコの鶏ガラとりを下茹したゆでして掃除し、大鍋へ。そこにたっぷりの水とタシ葱ねぎ、ニンジン、ショーガなどの野菜を入れて火にかける。あ、臭み取りのためにレイ酒も少し入れるかな。

あとは灰汁あくを取りながら弱火でコトコト煮込む。もちろん、魔法で時間短縮するつもりだが、それでもこの作業は少し時間が掛かる。

大鍋のサイズに、マイルが目を丸くしていた。

《いっぱい作るの！》

「みんなもお昼に食べるだろう？」

《もちろん、食べるの！》

ついでお昼ご飯用のスープも作るつもりだし、鶏ガラを煮込んでいる間にお昼ご飯用の料理やジャムやカスタードクリーム、シロップなんかの《無限収納インベントリ》にストックしておくものを作る予定でもある。

「お昼ご飯は……久しぶりにフレンチトーストにするか」

《フレンチトースト！ 嬉しいの！》

蜂蜜はちみつはもちろん、果物やジャム、チョコレートソース、アイスクリームなどをたくさん用意して、

好きなものをトッピングする形にしよう！

「とりあえず、いろんなジャムを作るかな」

《わたし、リーゴの実のジャムが食べたいの！》

「了解！ リーゴの実の他に、ランカ、オレン、イチ……あとはリコの実のジャムを作るか。マイル、他に食べたい味はあるか？」

《えっと、えっと……ロンの実もいいの！》

「うん、ロンの実もいいな。というか、いつそのこと、持っている果物全部のジャムを作るかな？」

《賛成なの！》

果実についてはそれぞれ、地球のもので似ているのを挙げると、リーゴはリンゴ、ランカは桃。オレン、イチ、リコはオレンジ、イチゴ、アセロラで、マイルが言っていたロンはメロンだ。

別にいくつかの種類に絞る必要はないので、順番に全種類のジャムと、人数分のフレンチトーストを作っていった。

《いっぱい作ったの！》

「ははっ、全部並べると凄い光景だな。マイル、手伝ってくれてありがとう」

全て作り終えたところで、瓶詰めされた色とりどりのジャムをあえて《無限収納》にしまわずに並べてみると、なかなか見応えのある光景になった。これもマイルが小さな身体で一生懸命、混ぜるを手伝ってくれたお蔭だな。

《役に立って良かったの！ あ、タクミ兄、スープはまだなの？》

「ん？ そろそろ良さそうだな」

僕は良い具合に煮込まれたスープから鶏ガラと野菜を綺麗に取り除き、塩で味を調えて、最後に溶き卵を加えていく。

「よし、これでいいな」

《美味しそうなの！》

「ありがとう。マイル、少し味見してくれるか？」

《いいの！》

マイルは嬉しそうに、尻尾をピンと立てた。

「マイルは手伝ってくれたからな。みんなには内緒な」

《うんなの！》

小皿に少しスープをよそってマイルに渡すと、マイルは嬉しそうにスープを飲む。

《とっても美味しいの！》

「本当？ 良かった」

うん、味は問題ないようだな。

「じゃあ、ここからが本番だ。——《フリーズ》」

僕はカップ一杯分のスープを、別の鍋に移して煮詰めて水分を減らし、ある程度濃くなったとこ

ろで四角い容器に移して魔法で凍らせる。

《凍らせちゃったの?》

「そうだよ。それでこれを——《ドライ》」

今度は凍らせたスープを魔法で乾燥させていく。えっと、この作業の時は真空に近いほうがいいんだっただよな?

風魔法で真空に近い状態を作りつつ、乾燥させることしばし。

《カラカラになったの!》

「水分がなくなったからな。ん、これでいいのかな?」

《完成なの?》

「……たぶん?」

《たぶんなの?》

「そう。なにせ、初めて作ったからな」

カラカラになったスープを指でつまんで、状態を確認する。

けっこう軽くなったけど、ちゃんと乾燥されているので問題ないかな?

「見る限りでは大丈夫そうだな。まあ、お湯で戻してみればわかるか」

でき上がったばかりのフリーズドライのスープをカップに入れ、お湯を注いでみる。

《お湯を入れちゃうの?》

「そうだよ。あの乾燥した状態で持ち歩いて、食べる時にこうやってお湯を注いで」

スプーンでよくかき混ぜれば、見た感じは普通のスープに戻った。

《スープに戻ったの!》

「うん、大丈夫みたいだな」

試しに飲んでみれば、少ししょっぱかった。だが、それは注ぐお湯の量を変えれば問題ない。

《タクミ兄、持ち歩きやすいスープを作ったの?》

「うん、そうだよ」

《凄いの!》

「そうか? ありがとう」

上手くできたので、あとは微調整。乾燥させた状態をもう少し小さくしたいので、味をより濃くめに、少ない量でフリーズドライできるようにした。

それから卵スープのフリーズドライを量産していく。

「おにーちゃん!」

量産が終わったところで、子供達が駆け寄って来る。

《お兄ちゃん、お腹空いた〜》

《兄ちゃん、ご飯ちょうだい!》

どうやらお腹が空いたので戻ってきたようだ。

「じゃあ、お昼ご飯にするか」

《みんな、ご飯はフレンチトーストなの！》

「《《《《やったー！》》》》」

みんなにそれぞれ好きなトッピングを選ばせてみる。

「できたー！」

《アレンのナナの実にチョコアイスとチョコソースの組み合わせ、とても美味しそうね》

《エレナのイチヂクしも美味しそうですよ》

「えへへ」

「フィートのおいしそう！」

「ボルトのも！」

《あら、ありがとう》

《ありがとうございます》

アレンとエレナ、フィート、ボルトは、自分の好きな果物、ジャム、アイスを一種類ずつ選んでいく。

《ボクはイチチとリーゴ。あとはね、ミルクアイスとチョコアイス。あ、木の实のアイスも捨て難い！ ロンの実のジャムもいいな》

《オレは全部！》

《わたしはリーゴのジャムがいいの！》

ジュールとベクトルは数種類ずつ選び、マイルに至ってはリーゴのジャムのみを選んだ。こういう時って、性格が出るよね。

《失敗した。美味しいんだけど、味が混ざってる》

《欲張るからなの！》

みんな美味しそうに食べるが、ジュールだけは選び過ぎたことを後悔し、マイルに駄目出しされていた。

《混ざってても美味しいよ？》

そんな中、ジュール以上に複数のトッピングを選んだベクトルが、あっけらかんと完食していたのがとても印象的であった。

お昼ご飯を済ませて少し休憩した後、僕は子供達に再び遊ぼうと伝える。

フリーズドライのスープも完成したので、今度は僕も一緒にだ。

「さて、何をするかな？」

シャボン風船は午前中に十分堪能したようなので、午後からは違うことをしようと思い、まずは子供達に確認してみる。

「えつとね……さいしゅー！」

すると子供達は、再び採取と叫んだ。

「……まあ、仕事のような内容とはいえ、楽しければ何でもいいか」

「わーいー！」

「採取をするなら、鉱山の薬草のほうがいいから、山に移動するか。ジュール、フィート、お願いしてもいいか？」

《いいよ》

《大丈夫よ》

僕はジュールに、アレンとエレナがフィートに乗って、すぐに山の中腹まで運んでもらう。

《お兄ちゃん、こちら辺でいいかな？》

「そうだな。ジュール、フィート、ありがとう」

《このくらい何でもないよ》

《ふふっ。そうよ、いつでも歓迎よ》

ジュールの背から降りて頭を撫でてあげると、フィートも寄って来たので、続いて撫でる。

「じゃあ、ここから登りながら採取するか」

「うんー！」

《よし、アレン、エレナ！ いっぱい薬草を見つけるぞー》

「おー！」

まず初めに、ジュールがアレンとエレナを引き連れて駆け出していく。

《周囲の警戒はぼくがしますか？ それともベクトルがしますか？》

《オレがやる！ 魔物は任せて！ 行ってくる！》

続いて、ボルトとベクトルが、どちらが見張り担当になるか決める。

まあ、ベクトルが張り切って立候補し、早々に駆け出して行っただけだね。

《自ら狩りに行っちゃったの！》

《ここにて周囲を気にしていれば良かったのだけだね》

《万が一、ベクトルが気づかない魔物が近づいてきても、ぼくが対処しますからいいんじゃないですか？》

《そうね、良い素材を持って帰ってくるのならいいかしら？》

《そうなの！ 美味しいお肉とか良い毛皮を期待するの！》

フィート、ボルト、マイルが、ベクトルの行動に呆れながらも許容を見せる。

「じゃあ、フィート、ボルト、マイルはどうするんだ？」

《ん、私はどうしようかな？ 兄様は薬草を探すの？》

「うん、そうするつもりだよ。ゆっくりとね。まあ、薬草だけじゃなく食材とかも探すけどな」

フィートの言葉に頷くと、三匹とも目を輝かせる。

《じゃあ、私は兄様と一緒に探すわ。いいでしょう？》

《わたしも！ わたしもタクミ兄と一緒に探すの！》

《兄上、ぼくもいいですか？》

「もちろんだよ。じゃあ、行こうか」

僕はフィート、ボルト、マイルと一緒にゆつくりと歩き出した。

《それにしても、街の近くの山なのに全然人の気配はないのね》

「そうだな。みんな、坑道の方に行ってしまうのかな？」

《では、その坑道のお蔭でぼく達がこうして兄上達とご一緒できるんですね！》

ボルトが嬉しそうに言うので、僕は頷く。

「ははは、そうなるな。でも、みんな坑道の方に行くせいで、鉱山の薬草採取をする人が少なくなつて、品薄になつてきているみたいだけだな」

《じゃあ、わたし達が頑張つて採取すれば解決なの！》

「そうだね。まあ、僕達に都合が良いのは確かだから、ありがたくこの時間を堪能しようか」

僕達はゆつたりと喋りながら歩き、大量のテング草と火炎草、少量の月詠草とみわくの花をしつかりと採取した。

と、そこでとある草が目にとまった。

「おっと、これは……」

《あら、兄様、珍しいものを見つけたわね》

《フィート、これは火炎草じゃないんですか？》

《似ているけど、違うの！ これは火^{かえん}焰^{えん}草なの！》

火^{かえん}焰^{えん}草は火炎草の上位版の薬草であり、見た目はほとんど一緒だが、少し暗めの色をしている。そして、大変珍しいものである。

「先に歩いているアレンとエレナが見つけなくて、僕が見つけるなんて珍しいな」

《も、もしかして、同じ道を歩いていると思ってましたが、違うところを歩いているんじゃないですか!?》

《大変なの！ はぐれちゃったの!?》

僕の言葉を聞いて、ボルトとマイルがキョロキョロと周りを見渡し、アレンとエレナの姿を捜す。

《ボルト、マイル、落ち着いて。大丈夫よ、そんなに遠くには行っていないわ》

《あ、そうでした。フィートがいれば匂いで追えましたよね。というか、ぼくが空から捜せばいいんですよ》

《そうだったの！ 子供達のほうにもジュールがいるから問題なかったの！》

「そうだな。慌てる必要はないよ」

姿が見えなくても、ジュールやフィートがいれば匂いで追える。

それに、アレンとエレナには『追跡リング』という居場所のわかる魔道具を身に付けさせているので、ウィンドウ画面の地図に位置が表示されているはずだ。

「おにーちゃん!」

「お? 噂(うわさ)をしたら戻ってきたようだな」

《あら、本当ね》

子供達が全力疾走(しつそう)でこちらに駆けてくる姿が見えた。

「おかえり。どこまで行っていたんだ?」

僕のもとに戻ってきた途端、飛び込むように抱き着いてきたので二人の頭を撫でる。

「あのね、あのね。あっちにね」

「けむりのでる」

「みずうみがあったの」

「煙の出る……湖? ん?」

僕は子供達が言っている意味がわからず、二人に同行していたジュールを見る。

《えっとね、あれは湯気だね。お湯の湖だった!》

「湯気の出る湖? で、ここは鉱山だし……もしかして、それは温泉かな?」

「おんせん?」

初めて聞く言葉に、アレンとエレナが首を傾げる。

「大きいお風呂のことだね」

「それ!」

《それだ!》

「へえ、それは見てみたいな。そこに案内してくれるかい?」

「《うん!》」

本当に温泉を見つけたのか気になったので、とりあえず、そこに案内してもらうことにする。

「「あっちだよ」」

《お兄ちゃん、あそこだよ。あそこ!》

「ああ、あそこか!」

しばらく歩いていくと、アレンとエレナ、ジュールの示す方向に湯気が上っているのが見えてきた。

「……結構な湯気だな」

温泉(仮)からかなりの湯気が発生しているらしく、周辺一帯が湯気で真っ白だった。

「でも、臭いは特にしないな」

《臭い?》

《そう。温泉といえば、硫黄(いおう)……独特な臭いがするものなんだが、それが感じないんだよ」

《臭いの?》

「あ、ジュールやフィート、ベクトルにはきついかもしれないな」

《っ!! それは嫌だ! お兄ちゃん、行くのを止めよう!》

臭いと聞いて、途端、ジュールが温泉（仮）に行くのを嫌がる。

「今の時点で臭いがしないから大丈夫だよ。まあ、ちよつとでもジュールが嫌な臭いがしたら、その時は行くのを止めてすぐに離れることにしよう？」

《……それなら》

「じゃあ、ジュール、嫌な臭いがしたらすぐに教えてくれ」

《わかった》

しぶしぶだがジュールが納得してくれたので、温泉（仮）にもっと近づくことにする。

「フィートもベクト……あつ！ ベクトルがいらない！」

と、その時、僕はベクトルがいらないことに気がついた。

《あらあら、ベクトルは狩りに行ったままだったわね》

《ぼくもすっかり忘れていました》

《うっかりしていたの！》

僕だけじゃなく、みんなも忘れていたらしい。

だが、ベクトルなら匂いを追ってこられるだろうということになり、僕達はこのまま温泉（仮）に向かうことにした。

辿り着いた温泉（仮）は、全体が湯気で覆われているため、正確なところはわからなかったが、

なかなかの広さである。しかも、臭いは全くと言っていいほどしない。

「肝心の水は……」

僕はすぐに【鑑定^{かんてい}】で調べてみることにした。

《兄様、どう？》

「何も悪い成分はないみたいだな」

水質に何も問題はなく、温度も人肌より少し高いくらいのようなのだ。

さすがに【鑑定】では温泉の効能などはわからないが、問題ないということなら――

「これは入るしかないよな？」

「「おふろーー」」

街の外で、しかも魔物が出るかもしれない場所で裸^{はだか}になるのは流石^{さすが}に無防備かもしれない。といつても、僕達にはジュール達がいるので問題ないと判断し、湯に浸かることにした。

早速、服を脱いで温泉に浸かってみる。

「ふはあ〜」

「「ふはあ〜」」

絶妙にいい湯加減で、僕はもちろん、アレンとエレナも気の抜けた声を出した。

《温かい水って気持ち良いね》

《本当ね。とても落ち着くわ》

《これは心地よいです》

《初めての感覚なの》

ジュール、フィート、ボルト、マイルも気持ち良さそうに湯に浸かっている。

《みんな、こんなところにいた！》

少し体が温まってきた頃、全速力でベクトルが駆け込んできた。

《兄ちゃん、酷いよ！ オレのこと置いて行ったでしょう！ しかも、みんなであつたり寛いでるし!!》

「ごめん、ごめん。ベクトルの鼻は優秀だからな。匂いを辿って必ず追いついてくれるって信じていたんだ」

《そ、そんなことで誤魔化されないからね!》

最初は息巻くように文句を言っていたベクトルだが、僕の言い訳を聞くと、途端、照れたようにそっぽを向いた。

《ベクトル、兄様を責めては駄目よ。兄様が行きたいところに行くのを助ける。それが私達の役目なのだからね》

《そうだけども》

《責めるなら、合図を出さなかった私達にしろさい》

フィートがそう諫めていると、ジュール、ボルト、マイルが順番に謝罪する。

《ベクトル、ごめんよ。次はちゃんと呼ぶからさ》

《すみません。気をつけます》

《ごめんなの》

そう口々に謝られて、ベクトルはしょうがないな、と納得した様子を見せる。

《だけど、ベクトル! そもそも、兄様達に魔物が近づかないようにしに行つたのだから、兄様達の位置はちゃんと把握していないと駄目でしょう! 狩りに夢中になって見失つた……なんて言わないわよね?》

しかしそこで、フィートが謝罪はここまで、とばかりに表情を一変させ、今度は説教を始めた。

《そこはベクトルの悪い癖よ。直すようにしろさい! だいたいベクトルは……》

『……がるるん』

ベクトルはすっかり項垂れてしまっているが、フィートの説教は終わりそうにない。

さすがに可哀想だから止めようか。

「ありがとう、フィート。でも、僕も悪かったことだし、そろそろ止めてあげて」

《もお、兄様は甘いんだから。——ベクトル、兄様に免じて今日はこのくらいにしてあげるけれど、今度からはもう少し考えてから行動するのよ》

《はゝい。気をつけまゝす》

フィートに声を掛けると、仕方がないとばかりに説教を終了してくれた。